？

――されたのか　――したのか

理不尽に異邦で惨殺された青年　理由のない因果で刺した少女

次第に問いが回数を増し　脅かされるものが脅かす

*異常・恐怖・逃走・解析・答案・断罪　…常識の機能不全？*

――答えずに蹴飛ばした罪――

愛する人に美しく歩かせ

その逆から観るために

僕もまた確固たる空想の大地に立ち

幸福の丸呑みに　不幸の分かち合いを　優先させ

――問い返す――

ならば　犠牲には

いつか報いられることもあるのか　と

光沢する沈鬱

遠野　沢庵

――古き善き時代、とついつい口にしてしまいがちではないでしょうか。今の時代について唯一無二の大いなる責任を持ちながらも、その事実に無頓着に紡ぎあげていく、『当たり前』などといった周囲の実感もまた、未来からすれば及第点以上の感慨をもってこの冠を被せられうるのです。

あの時代、我々は星を掴んだのだとおっしゃいます。もはや何もかも風化してしまったような時代においても、まるで目に見てきたかのように語られるのがお得意の子供じみた慣わしではありましょうが、そういったお定まりの情動反応の発生にも、一定の理解を示してやれないことはないのです。天空に星が実在していたということは、そうでない上界を与えられた者にとって、それが少々錯覚的で冗談めいたものであったり、たったの448年間しか完全な生を与えられなかったりしたものだとしても、やはり何といっても大きな思い出には相違ございません。

　今より、天海群島の夢想を消去する騒動の張本人達についてほんの少々、知っているだけのことは記せると思っています。そうは申しましても元来話好きの性質のためにどうなるかはわかりませんし、大河的に整理しながら進めないと兎角こういった話題は混乱しがちなものですから、多少劇画調になるかもしれませんがご容赦ください。何分又聞きなものでして、とある踏破家がある地層から土偶のごときを発掘した際に、彼者から聞いたというのです。無論歴史研究上大きな意義を持つ内容ではあります。しかし少なくとも彼は公表する前に何らかの迷いを持って相談に訪れたのでしょう。そしてまた、彼だけでなく、私もまた、今ここに書き連ねながら自問自答を繰り返しているのです――

クナウザス新暦＊＊＊年　＊＊＊王国在住　＊＊＊・＊＊＊著詳細小事にて

訳者注：本稿は独創幻想世界クナウザスを舞台とした作品の一つであり、次項より世界観紹介等ありますので、本編と併せましてご確認いただければ至極幸いです。なお、この小説は地球人種の『15歳以上』の読者を推奨とし、年齢問わず善く読んでいただきたく、お願い申し上げます。

　本編は16ページより始まります。

基礎事項注釈（新暦以降・タラム梵子科学研究機関による統一見解より）

１、クナウザス創生過程について

　とある超高次元の宇宙空間においては、あまりにも複雑で多すぎる意義と素材が詰め込まれていたために、合成と分裂の過程が四次元に包括されうる低次元宇宙のようにはうまくいかず、高密度のガスに覆われた白っぽい宇宙空間の中に、巨大な星が一つだけ団子のように生まれただけであった捏ビッグバン期。さらにこの星の特殊な重力波が空間を捻じ曲げて虚無の世界に繋がる穴を開けてしまい、せっかくできた星も引き裂かれて半分になってしまう捏インフレーション期。飲み込まれた半分が時空の穴に栓をしてくれたおかげで半球惑星はかろうじて現存し、このときの勢いによって周囲のガスが攪拌され、半球面上を覆う巨大な渦が形成される。極々小さい針の穴のようなガスの中心は、台風の目のように周囲の渦と物質やエナギーを遣り取りしていく45億年前。次第にその周囲はエナギーが濃すぎるために虚無と同じような状態になり、中心を守る分厚い壁となる。渦の勢いは逆に中心部分に引き込まれ、有機物を含めた多様な物質、特には多量の梵子次項参照を含んで中心世界を攪拌し続ける。これを一般に『混沌の渦』と称する。なお、中心の面積はちょうど地球表面と同じ、さらに位置も捩れの位置であるが相関がある。よって、様々な点において地球とは密接な関係にあるようだ。宇宙唯一の星であるためか、この世界を客観的に名指しする呼称はずっと後になるまでなかったが、後世での言い習わしに倣い、この世界一帯を『クナウザス』と称する。

　混沌の渦は地球における古代の海洋の、いや、それ以上に力強い役割を果たし、結果、ありとあらゆる可能性を実現させる条件の中で無数の生物がほとんど同時期に発生、進化と滅亡を繰り返し、数億年という短期間で後世の生物層の92％に当たる生物門が出現する20億年前。中でも梵子を大量に取り込んで生活することで、文明などという概念すら通り越し、神をも恐れぬ強大な力を秘めた竜や魔族といった者達が食物連鎖の頂点に君臨し、昼も夜もない暗黒の世界で日夜激しい生存競争を繰り広げたのであった。

２、梵子という概念について

　量子、霊子、といった高度な概念・素子をすら凌駕する究極の絶対完全統一理論を構築する素子が梵子である。これは、物質や情報だけでなく、行為、意義、結果、因果、あらゆるものの『中庸』状態にある素子として認識される。次元レベルが低いほど梵子は『素化』という現象を起こして互いに偏重しながら収束してしまうため、例えば地球の浮かんでいる、四次元に包括されるうる低次元宇宙においては梵子そのものを取り出すことはほとんど不可能に近いだろうゆえにその下位素子で何とか試行錯誤してある程度の希望を実現していく粗野な『科学』が流行っている。ところが超高次元世界クナウザスにおいては、高次的因果律の下、梵子がそのままで空気のようにふんだんに存在するため、これを利用すれば原理的には『指先一つでどんな願いでも叶えられる』はずである実際には高次的因果律や反梵子が邪魔をして大きなことほど達成しにくい。これは、いわゆる『念精神と魂の力』をデバイスとした『梵子術』や『梵子科学』などの要素として扱われている。なお、素梵子は『固化完全に物質や方向性の決まった因果として定着すること』する前の半熟状態なら別の利用価値があり、これをもって独自の召還術を行使することを『素梵子他象』と呼ぶ。

３、アナケー発祥説について

　１の項で概説し、本稿などでも紹介される歴史観が存在するにもかかわらず、やはり絶対的根拠のある科学的事実として、後世の多少なりとも学のあるクナウザス人は同時並列的に以下のような定義を受け入れねばならない。『この世界は、不測の事態によって自壊してしまった別のより有意義な上位世界の後釜として、そのブラックホール的な影響に引きずられ、ほんのちょっと前新暦６１２年・学説発見時に捏造された世界である』。上位世界については、エルピースという唯一究極の知的生命体が生活していたということしかわかっていないが、それに由来する出土品『無頼品と呼ばれる』は少なくなく、特に学説の根拠が見つかったアナケー地方で多く産出される。

４、虚神と信仰について

　終結へと向かっていた混沌の時代に事実上の引導を渡したのが『四大虚神』の誕生である。これは素梵子化した自然概念の基礎たる『地水風化』の各々のエナギーが独自の渦を形成し、さらに同系統の力を呼び集めて生み出された、一種一固体の、無限の生命力を持った超概念生命体である。神のごとき力と世界に対する影響力を持ちながら、目に見えて現存する生物的存在でもあるために彼らは『虚神』と呼ばれ、生物とも神ともつかない曖昧な位置づけに属している。彼らの他にも５体の虚神が発生した。

四大虚神の影響でクナウザスは新たなる機微を内在する世界へと急激に変貌を遂げていく。それに合わせ、兄弟的位置づけにある地球のような昼夜の区別や時間概念、天空を彩る星々が欲しくなった地の神を除く三神は、後付的ではあるが、これらを創世の仕上げとして付け足すべく、各々同時期に『天の虚神』を『空想』したその実在は不明とされるが、神の強い空想は現実に勝る意義を持つ。地の神は独自に別種の子を考え、大地を刷新する偉大な仕事を成し遂げた植物界の王を『草木の虚神』に引き上げる。また、四散した混沌の渦の残り香が中央大陸に集結、四大虚神を始め、混沌期以降の世界を憎む『闇の虚神』となり、その反動現象として『光の虚神』も出現した。さらに後世においては『無の虚神』が現れることになる合わせて九大虚神などともいう。その他にも、あらゆる神を区別なく一個のものとして考える『総体（もしくは相対）神』という考え方もあるが、神の観えるクナウザスにおいて、哲学者でもなければ、近代以前では抽象的なものを信奉するものは少なかった。クナウザス由来でない人種の『人者種』が興した『創世主教』および『』において、無の虚神や総体神概念がクローズアップされることになる。現代では、世界の四大を実虚神、それ以外を非実虚神と定義しているが、各宗派はそれぞれに独自の神学を持っており、あまり学術的客観分類を気にしていないことが多い。

こういった虚神の存在と梵子や素梵子の流動経路、近年の別次元への扉は密接に絡み合い、術法や信仰とも深い因果関係にある。だが、あくまでも信仰は内的な宇宙に浸透することで外的な宇宙の理に触れることであり、信じる精神の素養や状況に左右されるものであるから、教義と神々の意識や意義が必ずしも合致せず、それどころか全く無関係なことすらある。

５、新暦までの歴史簡易年表

紀元前150億年　宇宙開闢・唯一惑星が誕生して半球惑星になる

紀元前45億年　クナウザス世界の区域限定・混沌の渦形成

混沌期～紀元前二十億年

神話期～紀元前十億年　（ここまでを創生紀と称す）

古生代～紀元前数億年　（至低紀などを含む）

中世代～紀元前数百万年（浮島空紀などを含む）

近代～新暦元年以降　（低次元宇宙より入植軍来襲・クナウザスという世界名が初めて使われる）

現代～新暦六百年以降　（大陸間大戦後・踏破家集団の台頭）



紀元前740万年前（浮島空紀後期）の世界情勢

１、浮島空紀までの歴史概略

　創生紀、莫大な量の梵子を放散していた混沌の渦が世の中を覆っていた暗黒時代からすでにして、梵子の凝集は、生物達の活動も手伝って、ゆっくりとではあるがとどめようもなく着実に進行している。それがいわゆる神話期の主人公たる『虚神』達を生み出し、彼らの力を持って世界の様相を大きく変えることとなったが、まずは彼らの存在自体が非常に大掛かりな梵子の素梵子化現象であったといえる。これを期に、梵子を甚大に消費する型の強大な生物達（混沌の生物群）から、小さいが比較的社会的で、知性と精神の力で梵子術を行使する型の『人類』に世界の中心は移ることとなった。

　混沌の時代終了後もしばらくは神話戦争期に虚神達の従者として歴史の影に隠れていた彼らであったが、事実上の停戦となった前線の停滞に伴って虚神達の権威が弱まり、彼ら独自の勢力範囲が次第に広がっていく。特に紀元前４億年前の鯨者族の海洋帝国は、高度な梵子科学技術と深海の資源によって少数にも関わらず海中から地上のほとんど全てを支配することとなった。だが、彼らは海を司る神を奉り、その上位神である水の女神をすら支配下に置こうとしたかどで、海神ともども滅ぼされてしまう紀元前3億5千万年前・至低紀。その後は多様な人種同士や、他のより強大で多様な生物群などを含めた各地での小競り合いによって勢力地図が頻繁に塗り替えられ、多少なりとも大きな統一を成し遂げたのは、確証無き伝承白き一巻角を額に突出せし聖人の建てた理想郷、などの伝説を除けばディアネムル大陸の『黄権帝国』や『神聖帝国』共に紀元前2億年前くらいである。

　自然環境を含めた世界の様相に大きな変化が訪れたのは紀元前740万年前。天空の素梵子化がついに閾値に達し、それまで宇宙空間に存在できなかったために適当に追いやられていた星の出来損ない、欠片が、突如としてクナウザスの空に次々と姿を現していったのである。これらは宇宙空間に唯一存在する星である超巨大半球惑星から吹き飛ばされて生まれたが、その後、『宇宙にはクナウザスのみ存在し、天体の星々はそのために創られたにすぎない虚像である』という天空の概念に基づいて存在自体を時空壁に格納されてしまったものである。最終的に顕現したこのような昼も夜も同じく観える星々（『』）は二十以上。比較的大きい十個ほどを『戯惑星』、他の星を従えたり発光したりして影響が大きいものは『戯恒星』と特別に称することもあるが、非常に小さいものは『戯浮島』と呼ばれて原則としては星には数えない諸説ある。

　沈星達は梵子的に特殊な重力を発し、クナウザスの重力や磁場と干渉して周囲の一帯の重力を不思議なやり方で弱めてしまった。そのため、空気などは存在するのに、物質がその中で簡単に浮遊することが可能となる。初期は環境の激烈な変異によって天変地異が続発し、人々は低き星々の『誕生』を世界の終わりかと恐れたものだが、しばらくして落ち着くと沈星独自の資源を求め、比較的低い場所にある恒星に直接高い山から登る者もあれば、離着陸動力のみを持つ簡易飛行船を開発するなどして、どんどん『浮島空域特殊重力相殺が起きている一帯の呼称』に進出、俄かに活気付く。さらに、いくつかの星には鯨族の末裔が時空転移で落ち延びており、彼らとの交易も盛んになる。なお、彼らは『星者海洋帝国時代は超大型の知的生物であった彼らだが、狭い星の生活に適応するために人型を真似て小型化した』とも呼ばれた。

　沈星は活発に空域内を流動しといっても極めて固定力が強いクナウザスの大陸移動に比べたら、という意味で、百年周期くらいであるから、短い浮島空紀の間にはあまり変わらなかった、多くの特殊な気象を発生させるなど、この短い期間に他の時代でも類を見ない様々な注目すべき現象が詰まっていたが、それ自体は地上に思いの他影響が少なく、閉鎖的空間であるとも言えた。沈星の景観は多くが殺風景だが無機質的な美観はあるまた、植林や機械生物が持ち込まれたり、沈星に付着していた新種のウイルスによって変異した生物など、独自の生物圏を構築していた。

　しかしそれから数十年も経たぬうちに、地上の人類は危機に陥る。友好的と思われていた星者達は、実は再び地上を外界から支配すべく海洋帝国以来数億年もの間忍耐と策謀を練っていたのであり、地上に混じった彼らは次々と地上国家の軍部を乗っ取り、支配階級を暗殺、同時に各惑星の拠点から次々と占領軍を繰り出して、地上制圧策戦を開始したのであった。

２、当時の軍略

　当初、沈星側の軍隊は梵子科学技術による飛空挺から重力の理を利用して一方的な爆撃を繰り返し、地上軍が何とか接近戦闘を試みても、星者の開発した、空域で凄まじい行動性能と戦闘能力を発揮する『後述参照』と呼ばれる機兵種の前になす術もなかった。だが、星者達の中にも強制支配を快しとしない部族や個人も多く、また、金や権力次第でどうにでも動く勢力はどこにでもいるものなので、いつのまにかヴェシュマの開発技術や資材が地上勢力に流れてしまう。さらにはあまりにも性急で異常な変革的事態に神として関与せんものと、虚神達もそれぞれに地上側の援護に踏み切るだが、これもクナウザス人類の神からの自立に必要な試練と彼らには思われたらしく、『神託』や『使徒』の派遣などの遠回し的な応援に限られた。こうして、星者のパムタエ帝国の思惑通りには電光石火での支配は実現せず、戦闘は次第に長期化。こうなると何事も金にしてしまう商魂逞しい連中が次々と台頭し、両陣営の前線を舐め飛びながら仲介や交易を受け持ち、微妙に膠着した共存関係が三百年程続いたこれを前期・中期浮島空紀と称し、本稿の内容は後期の初めに当たる。

　基本的に戦闘は星側有利であり、地上側は被害覚悟で数を頼りにせざるを得ない。それでも対抗手段がないわけではない。星勢力が飛空挺で爆撃してきたら、梵子技術によって稼動する対空砲火や術法で時間を稼ぎ、その間に単独飛行が可能なヴェシュマを放って空域での足場を確保、離着陸が可能な『浮海栗簡易飛空挺』を打ち上げ、接近戦に持ち込んでからヴェシュマと歩兵で戦うのである。

３、当時の梵子科学技術

　人類の『機械的な後世におけるクナウザスの梵子科学技術者はこれを『無骨な』と同意に解釈する』梵子科学技術は至低紀における鯨者族の海洋文明を頂点とし、特殊で巨大な機械生産が盛んになっていたが、浮島空紀においてはその名残がまだ見られた。それは、後のビルドモンソ神聖帝国を端とした外洋貿易の発展、さらにはそれをそのまま空に移した空域での交易に活かされることで継承されていたからである。この時代の終わりとともに、これらは共知人類社会の福祉のためと銘打った軍事・学術分離による個々人の能力開発および完全真理究明を目指す総合学問的梵子術研究に代わっていく。

とはいえ、高度な法則性を持つ超高次元世界が、どんな側面から見てもそれ以下の世界に長じるというわけではない。低次元宇宙においては数人で物を燃やして電気を発生させ、機械を動かして掘削や溶接しなければならないそのための技術・知識の開発や発明も容易ではないところを、梵子術やそれを由来とする機器を扱えるクナウザス人はより効率の良い、楽な方を選択するのも自然なことであった。単純性が安定を生み、難しさが努力と進歩を生むゆえに地球人は高度だが副作用の強い科学技術を手に入れ、もはやその暴走的進化を自分でとめることすらできない。

一方『法則決壊現象『賢聖猫』ウムポ・ルサがその存在を預言し、後世において研究機関が立証した。因果律、物理法則、物質同士の関係性、時空の理など、定理として確実な事象が、一切の理由もなく全く違った結果を導き出したり、原因と結びついてしまうこと。』の影響で、単純に見えることがより複雑であったり、複雑なものが単純に結びついているといった、地球からすれば『捏造』としか見えないようなことが、クナウザスでは正しい現象として観測される。そこに生きるものの人生観や歴史の動きが別世界に生きる者のそれと関係性を保ちながらも異なる道を進んでいくとしても、それを参考にする機会を持つものは見逃すべきではあるまい。

このような背景の下、自在に軍艦の全機能を統括したり周囲との自由な通信を可能とする量子コンピュータやレーダーのごとき機器、燃料や弾丸を必要とせず、周囲からの梵子力や素梵子力を集積充填して放てる強力な梵子砲などといった優れた兵器が、全てを人力に頼る古びた木材船の中に、違和感なく溶け込むように搭載されていることも少なくない。

４、（WeSchMa）

　中期では開発競争といってもほとんどは星者の発明情報が地上にリークされることばかりだがによって数十種類にまで増えたが、後期では資源の枯渇によって生産が伸び悩み、ある程度洗練された機能性と役割を持つ以下の数種類が主流になっている。基本的には、沈星由来の『』をかつて地上にいた機鬼の一種を深海と沈星の中で飼いならした宙海鬼類に食わせつつ遺伝子改造した『機械生物ゴーレムのような術法による召還従者だけでなく、機械や鉱物、無機物と有機的な生物の中間的存在の総称』の一種である。ただしこの展鉄を動力とすると、環境破壊ガスが出るわけではないが、周囲の梵子がそのまま反梵子に変異してしまう現象梵子展開現象を引き起こし、素梵子化以上の急激な脅威として梵子的自然循環を著しく阻害する恐れがあったことを、後世の研究者が明らかにしている星者科学者の一部は気づいていたが、黙殺していたものと思われる。この『環境破壊』が四大虚神を浮島空紀の人類闘争に介入させた理由の一つだという説もある。

こうして作られたヴェシュマは家畜のように従順で、契約関係を結んだり、乗り込んで手足のように操ったりすることもできる。運転は操縦桿として操縦席に伸びている触手か瘤を掴むだけ。五体を自由にできるだけでなく、鬼の五感も共有できるため、うまく操れば相乗効果も期待できる。また、武装はサイズさえ合えば自由に装備させてやれるし、そのような武具は混沌の生物群がかつて装備していたものを発掘しさえすれば比較的容易に加工できる混沌時代の遺跡を多く有する地上側が、星者側より有利な唯一の点である。

この乗降兵器は地上では普通に強いだけだが、空域では展鉄と特殊能力のおかげで完全に自由に、すばやく行動できる。ただ、あくまでも生物なので金属疲労を起こす可能性もあり、長期的な移動のためには飛空挺に積むのがよい。受けた傷は修理もできるが、応急処置をして展鉄やそれに見合うエナギー資材などを食わせてやることで再生もできる。大事に鍛えれば成長もするようだ。人が乗っていなくても、ある程度は梵子言語や定められた合言葉などで外から動かしたり、自動行動させられる門番はできても複雑な戦闘行為はできない。

空域でのヴェシュマ一機は一般兵士数十人に相当するといわれる上、才能さえあればその能力は無尽蔵に跳ね上がる。操縦には特に筋力などが必要ないため、子供でも状況と素質が許せば戦場に駆り立てられることとなってしまう。前期にはより高性能なヴェシュマも多くあったが、全て破壊されたり死んだりした上、彼らに相応しい質のよい展鉄展銀などとも言うが枯渇したため、このような機体は例外を除いて後期に存在しない。以下に主な種類を挙げる。なお、空域では一定の浮遊ができる上、足場などもあるので歩兵でも集まればなんとか戦える。優秀な騎士なら一般的なヴェシュマ乗りとも十分に渡り合えることだろう。

（注・本稿では主要な固有名称や分類名称、クナウザス独自の発音をそのまま使用する場合などにドイツ語を借りてカタカナで表記するなど、任意で表記手法に揺らぎがあることをご容赦ください。）

＊

最もポピュラーな戦闘用。上半身が大きく頭の小さい赤鬼のような姿だが、動きはすばやく、その接近戦能力は絶大。ボウガンで射撃も得意、作業もできる優れもの。時代通して全世界で数十万台生産されたといわれる。一口に渦影といっても固体によって大きさや性能、性質すら変異があり、武装によって扱い方は様々に種別分けされる。乗り手が名前を付け、子供のように可愛がっている場合も多い。左か右の胸部が操縦席だが、乗り手の生存率を高めるために上から見ただけではどちらかわからないようにカムフラージュされている。また、浮島だけでなく雲も固い足場のように使える空中では少し泳ぐような感じになる。剣や盾、弓や鎧などの武具は、人間用のものをそのまま大きくしたようなものでも十分であり、巨人族の遺跡が多い『足穴台地』が名産地。以下に関連用語の一部を記す。

・…優秀な肉体を持つ機体を指す。高額で取引される。

・…全般的に乗り手と相性が良い機体。術法を使える者は機体を通して術を行使可能な場合も。

・…器用に武具や道具を扱うのがうまい機体。肉体が貧弱なら作業専門に回される。

・…一本の巨大な棍棒に無数の釘を刺し、先端から銛のようにぎざぎざの刃が出ている両手用標準武器。工場と資材さえあれば現在でも生産可能。

・…素梵子力が込められた巨大な石の環を両手で扱う。盾の代わりにもなる上、属性によって様々な追加効果がある。優秀なものはヴェシュマ一機より高額で取引されることもある。かつては混沌期の巨大生物の食器だったらしい。現在は生産不可能で、発掘のみの武器だが、素梵子力注入・変更だけは、沈星勢力において特殊な機械を用いて可能。丸剣とも呼ばれる。

・…梵子術が掛かった特殊な巨大矢。目標を自動追尾する上に突き刺さったあとに炸裂する。海牛も当たり所次第では一発で沈めるほどの恐るべき破壊力で、極めて価値が高い。発掘のみだが、パムタエ帝国は自力生産技術の開発に躍起。

・反射の盾…同名で一般人類用のサイズも存在する。弓矢や梵子術の射撃を防ぐだけでなく、それを打ち返す。ただし、数回跳ね返すと失効してしまう。発掘のみ。

・乱れの大杖…同名で一般人類用サイズも。頭部を叩くとヴェシュマ自体を混乱させ、一時的に同士討ちをさせたり行動を著しく制限させたりできる。発掘のみ。

・の冠…ヴェシュマに装備させる。操縦者の術法をヴェシュマに送信、増幅させて直接発動させる。高水準の術は送信できないが、下位水準の術でも十分に広範な威力となる。是於を用いるとさらに効果的。発掘か、星者は生産可能。高水準の術を得意としない沈星帝国側が多く用いる。

＊

　鳥の化け物のようなデザイン。地上爆撃はもちろん、予め武器になる果実機械植物を栽培して生産を飲み込むことで口から電撃などを吐ける。飛竜者と近縁であるという学者もいるが定かではない。空域を離れてもしばらく単独飛行ができ、偵察も得意。ただし、接近戦が不得意。飛行が苦手な地上軍が多く使っている。頭部に操縦席がある。

＊

三本足の獣の姿。足が速く、速攻や奇襲が得意。雄叫びをあげることで自分の周りの重力を狂わせ、敵の動きを悪くしたり、乗り手を混乱させたりできる。あまり強くないが、生産が容易で、人が乗らなくても自走や中枢機関の遠隔操作が可能なため、沈星帝国が大量に生産している。

＊

　獰猛な縞鬼をヴェシュマにしたもの。昔は主力だったが、今では稀少。渦影よりも器用で武器の扱いが得意な上、両手の間に強力な気弾を貯めて放てる。ただ、活動時間が短いため、輸送には船が必須。

＊…磁波を大獅子鷲と地上の合成炉で掛け合わせたもの。生産効率が低く、操縦するのが難しすぎるためにほとんど作られていないが、後期に『死神の乙女』サパニ機として多大な戦果を上げたため、有名になっている。もし使いこなせば、かつて風神軍の主力であった大獅子鷲の力で噴射推進し、空域での移動速度は渦影の1.8倍以上にもなるといわれる。手が鎌のようになっていて装備を変えることはできないが、これを振るうと真空を発し、遠距離攻撃できる。人が乗らないと一切の行動ができない。

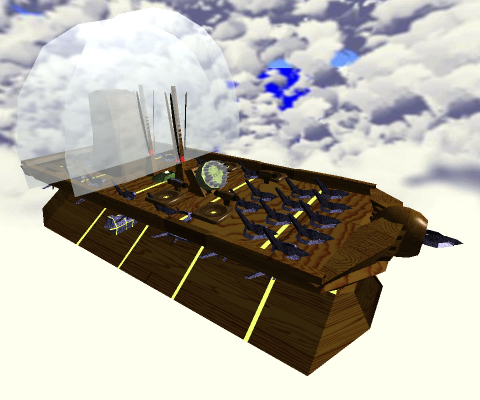
４、飛空挺

　簡易な梵子科学技術の助けを得た内燃機関動力によって『打ち上げ機地上側に寝返った梵子科学者が発明。一時的に空域の特殊重力をその真上から直線状に引き込む』を用いてロケットのように離着陸さえすれば、空域ではやガレー船と同じ原理で進むことができるため、一般に言う『飛行』するために機械的なエンジンを積んだ船は少なく、もっと単純な形状と機器の、海で使われていたものが若干の改造だけでほとんどそのまま活躍している。中期から後期にかけては主に沈星側で、高度な梵子技術によるエンジンを搭載した、沈星空域外での自力飛行が可能な（本当の意味での）飛空挺も僅かだが登場した。当然、多くの部位に展鉄が使われている。

＊…離着陸動力のみ搭載。ヴェシュマ一機搭載可能。もちろん、人を乗せて爆薬を落とすだけでも地上軍には脅威である。前期では沈星側が爆撃に使った。重力区域を自走できない上に飛行能力櫂による手動も低いが、生産が容易なので後期では主に地上軍が使っている。綽名は蛸壺。

＊…離着陸動力と風を受けるための帆、および弱い推進機器を搭載。星由来の海綿金を使っているために敵からの砲撃やバリスタに強い軍艦的存在。ヴェシュマも規模によって数機から十数機搭載可能。時代や地域によって様々に発展し、使用された。地上側の海牛はほとんどが巨大なガレー船タイプで、多数の乗員による直接の射撃や石弾砲撃、接弦による乗り込みが主な戦術だが、接弦されると数において分が悪い沈星帝国側が主に用いる海牛は、梵子科学技術による砲座を甲板や側面部に多数装備した戦列艦で、性能においては完全に圧倒している。なお、海牛船や浮海栗は雲上を推進すれば最大速度を出せるが、海とは違い、空域では高度を変えることで様々な三次元的戦略を採ることができる。

＊…ヴェシュマ一機搭載可能。骨組みと羽のみの簡素な姿ながら浮海栗の倍以上の速度で自力飛行が可能。これを数機組み合わせて海牛船を空域外に運搬することもできる。ただし、生身の人が乗るのは危険。

＊…本稿で主要な役割を持つ、極秘裏に開発された自力浮動航行巡洋艦。全長23ｍ全幅11ｍと小柄ながらヴェシュマ九機まで搭載可能、全速になると標準海牛の三倍速を出す空梵圧推進駆動空域中なら風の状態や高度に左右されない上、速度は落ちるが空域外でもある程度飛行能力を有するの二本マスト、船尾には舵と管制機器を積んだ塔楼乗員八人、自装バリスタ（火矢・雷矢）36門、遠距離射撃を弱める屈折防塵展開機器、さらに恐らく機械による武装としてはクナウザス全時代最大級の威力を誇るであろう主砲『荷梵子収束砲』を有する。また、最大の特色であるアナログインターフェイスを可能とするその超高度思考システムは偶発的に誕生したため、発明した梵子科学者達にすらその可能性を推し量ることはできなかった。

開発指導部はこの船の研究をもってそれまで複雑で人力に頼っていた操作を自動化し、質では圧倒するが数において劣る沈星帝国側の完全勝利に貢献しようと考えていたのだが――